ラマダン

サウジアラビアは一〇月一五日からラマダンに入った。

ラマダンでは、厳格な規範に則り、例外なく日中断食をする。その代わり夜は遅くまで食べたり飲んだりする。今年もそれが完全に繰り返され、日中はいつもの通り全体的に作業効率が悪くなり警備なども手薄になりやすかった。また、聖なる月だから、この間にテロが活発になる懸念があるのも同じだった。ラマダンおよびその前後はテロに対して要注意の時期なのだ。

慎太郎は、相変わらず注意深く行動していたが、より気持ちを引き締めていた。

慎太郎の特命事項は、石油相と会えるなどの好運に恵まれ着実に進展はしていたが、まだまだ先は長かった。そうではあったが、ラマダン開けはサウジ政府もお休みとなり、どのみち仕事にならないことから、慎太郎は、休暇に合わせ一年振りの帰国をしようと考えていた。あと一ヵ月弱でリヤドを

一度離れることになる。帰国前に、慎太郎は、アル・コザマ・センターにある香水師ハッサンの店に行ってみることにした。

慎太郎は、いつもの通り、店の前に置かれたデモンストレーション用の胸の高さほどもある大きな香炉の上で燃えているマーモールの煙を手で掬いその臭いを嗅いだ。

ところが、どういうわけか、いつものハッサンの声が店の中から聞こえてはこなかった。覗いてみると、ハッサンは奥のテーブルの上にノート・パソコンを置き夢中になってその画面を眺めていた。

「アッサラーム・アレイコム」

慎太郎が声をかけると、

「アレイコム・サラーム。やあ、シンタロウ、久し振りだね。元気？今、ちょっと手が離せないんだ。中へ入っておいでよ」

ハッサンは、かなり入れ込んでいた。額には汗がじっとり滲(にじ)んでいた。太ったハッサンはもともと汗かきだったが、それにしても尋常ではなかった。

「ハッサン、パソコン買ったの。一生懸命だね」

そう言って、慎太郎がパソコンの画面を覗くと、そこには男女が全裸で絡み合っている姿があった。良く見ると白人女性と黒人男性だった。女性は、喘(あえ)いで腰をあげ、そこに男が腰を一心不乱にぶつけ続けていた。激しかった。ハッサンは得意げにニヤニヤしながら、悪びれることも無く説明を始めた。

「慎太郎、このサイトは過激でね。あの黒人の精力は凄(すご)いよ。絶倫だね。さっきから始まって、なかなか終わらない。白人の娘も好きでね。最初はしおらしくしていたんだけど、今は、ほら、あの通り白い腰を激しく揺らして盛んに応えている。二人とも完全に燃え上がっちゃっている。音は出せないけど、二人の声を聞いたらもっと凄いと思うよ」

サウジでは、インターネット・サイトは完全に管理されているので、普通は、このようなサイトを見ることは出来ない筈だった。ポルノだけではなく過激なサイトは全てブロックされてしまう。それでも、このように、時には、それを擦り抜けてしまうものもあるのだろう。

「あ～、そうそう。今度、友達からこのパソコンを買ってね。今、試運転をしているところなんだ。随分安くしてくれてね。言ってくれれば、いつでも安く買ってあげるよ」

「今のところ、間に合っているから良いよ。有り難う。なかなか良いパソコンだね。お楽しみのようだから、また、来ようか」

「慎太郎、もう少し待ってくれるか。いくらなんでも、もうすぐ終わると思うんだ」

慎太郎は少し待つことにした。しかし、そんなにすぐには終わらなかった。慎太郎も映画のことだから演出だろうと思いつつ、その長さには辟易としていた。終いには、ハッサン同様凄いもんだと呆れながら待っていた。最後は、白人女性が力尽きてぐったりとしていた。その目の前に黒人男性が勝ち誇ったように仁王立ちしていた。

「終わったね」

「うん・・・」

ハッサンは、疲れたような顔をしていた。

「いや、凄かった。あんなのは、うちの女房には見せられないね」
「それはそうだよ。あんな上品で美しい奥さんは嫌がるだろうね。そんなのを見ているハッサンに幻滅しちゃうかもしれない」
「いや、そういうことじゃない。あんなの見たら、やはり私に幻滅を感じるだろうね。私も、もう年だから」
「そうかな。あれはビデオだし・・・奥さんはハッサンの気持ちは充分に解っているんじゃないの」
慎太郎はわけのわからないことを言って慰めざるを得なかった。
「いや、そんなもんじゃない・・・でも、有り難う、慎太郎。ところで、今日はなんだい」
ようやく、ハッサンは正気に戻った。
「もう少ししたら、日本に帰ろうかと思っているので、その前に一度顔を出しておこうと思ってね」
「そうか、有り難う。それは残念だね。折角仲良くなったのに・・・」

「ハッサン、そうじゃないよ。早合点しないで。帰ると言っても、一時帰国で、休暇が終わったら、また戻ってくるよ」
「良かった。良かった。それじゃ、うちの店で何か家族に土産でも買って行ったら」
「それでね。この間、実は、インドの香木を貰ったんだけど、ハッサンの店には置いてない」
「インドの香木、それはないね。あっても凄く高いよ。香木は全体に高いんだ。うちにも香木を置いてないわけではない。見せてあげるよ」
慎太郎は、ハッサンの店にも、香木が置いてあるのではないかと思っていたが、その通りだった。

ハッサンは、事務室のデスクの脇においてある大きな箱を開けた。すると、その中には、沢山の艶のある切り株のようなものが入っていた。ファイサリア・モールにある香木屋で売っているものは、皆、木切れのように小さいものばかりだったが、ハッサンの売っているものは、いかにも木の枝もしくは根っこのようなものだった。

「これは、インドのものではなく、カンボジアのものだ。でも、見ての通り良いものばかりだ。うちのは、その辺のモールで売っているようなケミカル(合成香料)をまぶしたようなものではない。皆、自然のままだ。値ははるがそれだけの価値は充分にある」

慎太郎は、説明を聞くまでもなく、その素晴らしさはわかった。香木からは、いかにも自然に染み出たと思われる黒い艶があった。

「高いって、どれくらいするの」

「一オギア(二八グラム)で二〇〇〇リヤル(約六万円)だ。もっとも、これはロイヤルファミリー用の値段だけどね」

確かに高かったが、以前に他の香木屋で聞いた時には最高

のものが一万リヤル(約三〇万円)と言っていたから、その五分の一だった。慎太郎は、思わず、

「思ったより安いね」

と言ってしまった。

「えっ、安いって・・・何だか慎太郎は急に金持ちになったね。それじゃ、買ってくれるかい」

「でも、また、値引きをしてくれるんだろう」

「う～ん、これは、そんなには負けられない。せいぜい、二割引きかな。慎太郎、これは良い買物だよ。今は、香木の値段はどんどんと上がっている。希少なものだから、将来は、もっと高くなる。買っておいて損はないよ」

「そうか。それじゃ、両親に買って行って、香りをたのしんでもらうとするかな」

「慎太郎、良い心掛けだ。それじゃ、それに免じて三割引きにしておくよ」

ハッサンは、試しにその香木を焚くと言ってくれた。慎太郎は勿体無いから良いと断ったが、あっと言う間に小さくちぎって炭の上に乗っけてしまった。すぐに青白い煙が立ち昇

り、周囲に芳香がした。素晴らしいものだった。
「慎太郎は香木を知っていたのか。うちは表に出して売っているわけじゃないし、高いものだから、慎太郎には見せなかった。それじゃ、ちょっと良いものを見せてあげよう。香木は高いけど、普通の木切れに香水を染み込ませたものがあるんだ。マプスースというんだけどね」
そう言って、ハッサンは大きなプラスチックのケースを開けた。中には沢山の木切れが、濃い茶褐色の液体の中に付けられていた。ハッサンは、それをプラスチックのシャベルでかき回すと少し掬いあげた。プーンと強い香水の臭いがした。かなり強烈な臭いだったが、慎太郎はすぐに慣れた。慣れると、素晴らしい香りだった。これもアラブ独特の香りだった。
慎太郎は、前に買ったマーモールとこのマプスースを五オギアづつ買って行くことにした。
「慎太郎、有り難う。それじゃ、土産というなら、もう少し安くしておくよ。そうだ、一オギアづつプレゼントしよう。アラブの香りを気に入ってくれている慎太郎には出血サービスだ」

本当に出血かどうかは疑わしいものだったが、大幅値引きは嬉しかった。慎太郎は、ハッサンのお蔭で良い土産を買うことが出来た。

原油価格が高騰したため植木は沈んでいた。

ようやく、イブラヒム、慎太郎と三人で石油談義が出来るようになった時も、バリの会議が芳しい結果では無かったこともあって原油市場の異常さに不満をあらわにしていた。

特に、アジアの石油需要の急増、それに伴う石油供給への懸念という急に主流になりつつある分析には腹を立てていた。アジアの石油需要が伸びるのは当然のことであり、それは想定範囲内のことであると力説していた。

需要増という点で強いて言えば経済が成熟した段階にある筈の米国が高い経済成長を遂げ、それを背景にして石油需要が伸びてしまったことが想定外だったと説明した。

また、いつもの通り、今は、昔とは経営戦略が大きく異なっていて、余計な余剰能力を持てないのが当りまえの時代で

あることを認識してこれと共生することが大切だと訴えていた。さらに、緊急時の議論と平時の議論と分けて考える必要もあり、徒な懸念を生じさせないことが肝要なのに、なかなかそれに気がついてくれないと嘆いた。

植木は、終いには、諦(あきら)めたように、話を全く変え、バリで久しぶりにトンカツが食べられて嬉しかったなどとあらぬことを喋った。慎太郎は、この一年間トンカツを食べていなかったので直ぐに植木に話を合わせた。

「それは良かったですね、自分も日本に帰ったら思い切り食べてやろうと思います」

イブラヒムはキョトンとして二人の話を聞いていた。モスレムが豚肉を食べるのは厳禁で、イブラヒムは生まれてこの方豚肉など食べたことが無かったので二人の嬉しがりようが全く理解出来なかった。

原油価格は、一〇月二二日には五五・一七ドルへと高騰し、

また、史上最高値を更新した。
イブラヒムはますます楽しそうだった。植木はますます沈んでいた。

幸い、ラマダンに入ってからテロ事件の発生は無く無事推移していた。
サウジ政府のテロ掃討作戦は相変わらず続いていた。
一〇月末には、リヤドで治安部隊が夜明け前にテロリストの隠れ家を急襲してテロリスト一人を逮捕した。この隠れ家では手榴弾二三個を含む大量の爆発物、銃、弾薬を押収した。
また、同じリヤドの別の場所で二人のテロ容疑者を逮捕し、機関銃二丁、ミサイル発射装置二台、爆弾三三個、通信装置、外国通貨数種類などを押収した。さらに、カシームの治安部隊がブライダの南方ハブト・アルジャテリで住宅、農場に通じる全ての道路を封鎖するとともにヘリコプター二機を使いテロリストを捜索した。

慎太郎は、ラマダン休暇の直前、一一月一一日にリヤドを出発し日本へ向かった。香港経由でどこにも寄らずに直行することにしたので一二日の夕方には成田に着いた。

慎太郎の実家は阪急今津線の逆瀬川駅から近かったので、その日の内に帰れないこともなかったが、翌日、三友商事本社に顔を出し仕事を片付けてから帰ることにしていた。

成田空港から、実家に電話だけは入れてみた。慎太郎が名前を言った途端に受話器から嬉しさに弾んだ父の声が聞こえてきた。その声を聞いて慎太郎の目には思わず涙がこみ上げてきた。そして、無事日本に帰れた幸せを噛み締めていた。

宿泊は会社で皇居前パレスホテルを予約してくれていた。東京駅を出て丸の内、皇居方面を眺めた時には懐かしかった。自分が東京に居たのが随分前のことのように思われた。

その日はそれほど疲れてはいなかったが、チェックインをすると荷物の整理、入浴をした後、翌日に備え、すぐにベッドに横になった。

翌日は、ホテルで朝食をとった後、午前一〇時に三友商事本社を訪れ、まず石渡の部屋に挨拶に行き、その後、石渡及び石油エネルギー部の特命プロジェクトチームの同僚と会議室で打ち合わせをした。

この打ち合わせは、慎太郎からの報告をメインにした簡単なものだった。慎太郎は、石油大臣と親しくなれたこと、サウジアラムコを訪問するよう勧められていることなどを掻(か)い摘んで話した。総じて、良い方向にあるとの評価をした。また、石油大臣から直接聞いたサウジの石油価格・生産政策についても報告した。

今回は初会合だったし、この特命プロジェクトの進展が慎太郎のリヤドでの調整に大きく依存していたこともあって、挨拶を兼ねた立ち上げ会に近いものだった。一段落したところで会議室に弁当が出され昼食となった。その間、チーム一人一人からリヤドでの生活、治安などについて質問が相次いでゆっくりと食事を取ることが出来なかったが慎太郎はいちいち丁寧に答えた。

最後には全員で激励してくれた。

その後、慎太郎は、また、石渡の部屋に立ち寄った。そこで、今晩の宴会について確認された。

石渡からは、リヤドを出る直前に、慎太郎も知り合いの石油エネルギー研究所の元研究理事中田、それに読朝新聞の編集委員古井との宴会をセットしているので宜しくと連絡を受けていたのだった。

二人ともサウジの話などを聞きたがっているということだったが、六本木の小料理屋という場所柄からすると石渡の好きなカラオケ入りのパーティーになるのではないかと思っていた。リヤドでのあじけない生活を慮(おもんばか)って石渡が気を使ってくれたのだろう。その気持ちを大切にして慎太郎は逸る心を抑え帰郷を一日遅らせていた。

ピックアップが午後六時過ぎ、それまでは自由行動との粋な計らいを石渡から告げられたので慎太郎は久しぶりに銀座に出てみることにした。サウジ人への土産物の購入などを兼ね、鳩居堂に行き、その後、すずらん通りにある行き付け

の紅茶専門店・マリアージュ・フレールに行って紅茶を飲むことにした。

地下鉄の出口を上がると銀座四丁目の交差点風景が広がる。

交差点に立つと慎太郎には懐かしさがふいに込み上げてきた。三越、和光、日産ギャラリー、交番そして三愛ビル、いつものお馴染みの風景がそこにはあった。

鳩居堂は三愛ビルのすぐ脇にある。一階は、狭い店内にところ狭しと、和紙を主にした便箋(びんせん)、封筒などの文房具類、和紙工芸品、額、扇、屏風、浮世絵などが並べられている。店内は、いつものことだが、高級な和服を着た品の良い女性、いつも銀座に買物に来ているようなセンスの良い洋服の主婦達、それに観光客と見られる外国人などでごった返していた。慎太郎は、その中を擦り抜け、まず二階に上がった。二階には、筆、墨、硯(すずり)、紙のいわゆる文房四宝、それにお香などが置かれていた。二階は一階に比べれば

人影は少なかった。

そこで、慎太郎はサウジで馴染み始めた香木を探してみた。まず、小さな木切れになった伽羅が目についた。ショーウィンドーには薄く小さな木切れが何枚か入った小さな袋が小箱に納められて幾つか並べられていたので、慎太郎は興味深くそれを見てみたが付けられていた値段を見て驚いた。

一グラム八〇〇〇円から値段が始まっていた。サウジの香木も高いことは高かったが超高級品を除けば、これほどではなかった。

伽羅は稀(まれ)に発見される最高級の香木で昔から貴族、大名から愛好されている貴重なものであることは知っていたが、今更ながらその価値に驚かされた。幽玄にして妙なる香りと形容され自然の営みから生じた奇跡とまで言われているので、香木に親しみ始めた慎太郎も一度はその香りを味わってみたいものと思っていた。しかし、これでは近寄ることは出来ない。

そろそろ一階が空いた頃かと階段を降りようとして、降り口に置かれた特別のショーウィンドーにも伽羅が置かれて

いることに気がついた。こちらは切り株のような自然のままのものだったが、中くらいのもので四〇〇万円弱、大きなものになると一〇〇〇万円を超えていた。

このようなものを誰が買うのか慎太郎には想像も付かなかった。慎太郎は溜(た)め息をつきながら階段を降り一階で外国人が喜びそうな土産物を物色した。

マリアージュ・フレールは、本店がパリにある有名な紅茶屋だ。

慎太郎は、パリでもノートルダム寺院に行ったついでに寄ったことがあった。銀座の店も、紅茶とケーキが好きな若い女性に人気があり、いつも女性で一杯だった。

慎太郎は、決まって空いていれば二階の窓際の席に座って、煎茶(せんちゃ)のアールグレーを注文していた。紅茶は、もともとアールグレーが好きだったが、ある時、この店で煎茶にもアールグレーがあることを知り病みつきとなった。

アールグレーはベルガモットの香りが付けられたもので

煎茶にその香りを付ければ良いのだと後から思ったが、それまでは思いも寄らないことだった。緑色の液体がアールグレーの香りを放つ不思議な雰囲気を味わっていた。

慎太郎にとってここは憩いの場所だった。ここに来るといつも気分が落ち着いた。

サウジ人も瞑想(めいそう)が好きだったが、慎太郎は、ここで煎茶のアールグレーを静かに啜りながら瞑想することもあった。

慎太郎がパレスホテルに戻り、土産物の整理をして、くつろいでいるうちに石渡が迎えに来る時間になってしまった。

六本木までは車では三十分程で着いた。車の中で石渡に聞いたところでは、この“六本木村”という小料理屋は、石油エネルギー研究所ＯＢである中田の行き付けの店だそうで、中田は、ここで時には夜を徹して飲むこともあったらしい。慎太郎も中田がカラオケ好きであることは良く知っていた。石渡も中田、古井とはしばしばここでカラオケをしているとのことだった。

店の扉を開けると、和服姿の愛想の良いママが迎えてくれた。

「石渡専務、いらっしゃい。毎度お世話さまです。どうぞ、どうぞ、中田先生はもうお見えになっています」

中田は既にマイク片手に歌い始めていた。慎太郎と石渡を見ると歌を途中で止め二人に握手を求めてきた。

「やあ、やあ、石渡さん、待っていました。済みません。お先に始めていて。あ、やあやあイケレンス、久しぶり。元気そうで何より」

もう軽くアルコールが入っているようだった。

「先に始めて頂いて全く問題ありません。我々の中ですからどうぞお構いなしで。ところで、イケレンスとはなんですか。中田先生」

と石渡が訊くと中田は陽気に答えた。

「池波君は、サウジアラビアに行っているんだろう。アラビアと言えばアラビアのロレンスじゃないか。池波とロレンスでイケレンスと言うわけだ」

「それは上手い。池波君にはロレンスのように活躍してもらわなくては」

と石渡は笑いながら言った。

「中田先生、恐れ入ります。それでは、及ばずながら私もロレンスのようにアラビアを勉強しアラビアに溶け込んでアラビアを楽しんでみたいと思います」

慎太郎も中田のイケレンスという表現にそう応えた。何気ない中田の表現の中に過酷なアラビアの中で是非がんばって欲しいという暖かな配慮を感じていた。

「イケレンス、サウジでは酒、豚は全く駄目なんだろう。今

日は、是非、両方ともとことん楽しんで行ってくれ。ところで、君が前回赴任していた時にリヤドで世話になったね。遅ればせながらお礼を言わせてもらうよ」

と中田は慎太郎に言った。慎太郎は、前回赴任時、国会議員を始め様々なミッションを迎えていたのですぐにはピンと来なかったが、中田がリヤドにエネルギー調査団の一員として来たことを思い出した。

「その節はたいしたことが出来ませんで失礼致しました。サウジではなかなか情報が取れないものですから、大分ご苦労されたのではないでしょうか」

慎太郎は、慌てて答えた。

「池波君、そんなことは全くない。実際、その地を訪ね肌で感じるということが一番大事なんだよ。僕の場合は、いつも、報告書などは出発前に九分通り仕上げているんで何の苦労もなかったが最後の味付けはやはり現地の体験になる。それが肝心なんだ。その意味では、今回、君は誰にも負けない貴重な体験を持てることになる」

と中田は答えた。

その時、マスターが石渡と慎太郎にビールを持ってきた。
「石渡専務、今日はごゆっくりしていって下さい。」、
「初めまして、六本木村へようこそ。奥村と言います。宜しくお願いします」
料理は既に中田が注文済みだった。
まず、ママが突き出しを持って来た。このママとマスターは中年の夫婦で二人でこの店を切り盛りしていた。
「今日はアラビアから戻られた方がいらっしゃるということで豚肉料理をふんだんに入れてみました。こちらがその方ですか」
「そうです。石渡の会社のもので池波と言います。宜しく。早速、豚肉を食べられて嬉しいです。お気遣い有難うございます」
と慎太郎は、気さくそうなママとマスターに言った。
「これからも、いろいろと豚肉料理が出ますから楽しみにして下さい。それから、いつでもカラオケを準備しますから歌いたいものがあればドンドンと言って下さい」

とマスターがニコニコ笑いながら慎太郎に勧めた。この店では、皆、カラオケを楽しんでいるようだった。慎太郎は、いつでも歌う準備は出来ていた。

そこに読朝新聞の古井編集委員がやってきた。

「皆、もうお揃いか、ちょっと遅くなったかな。申し訳ない」

古井は開口一番そう言うと一人一人握手をしてから池波に言った。

「やあ、池波君、お帰りなさい。元気そうだね。心配していたんだよ。無事帰れて良かった良かった」

すると中田が不意に口を挟んで古井に言った。

「おいおい、まるで本帰国でもしたような言い方だね。池波君は、また、リヤドに戻るんだから」

二人は、いつも会っているようで相当に親しそうな口ぶりだった。

「古井先生、有難うございます。中田先生の仰ったように二週間後には日本を発つ予定です」

「そうか、是非、気を付けて過ごしてくれ。イラクは当分落

ち着きそうもないし中東和平もあんまり進んでいないから、サウジもいつその影響を受けるか分からないからね。まあ、言うまでもなく何でも承知しているんだろうが・・・」

エネルギー問題全般に詳しく、中東情勢にも目を光らせている古井にそのように言われると慎太郎は光栄だった。

「はい、より気を付けて過ごすようにします。治安が最も良い場所に住んではいますが、テロに対する警戒を怠ったことはありませんし一〇〇％安全ということはないといつも肝に銘じています。今後も緊張して生活を送ることにします。ご心配有難うございます」

「まあ、そうは言っても、現地は、こちらで心配している程のこともないかもしれないし年がら年中緊張しているわけにもいかないだろうから適当に気を休めてくれ」

慎太郎は、古井は何でも良く心得ていると感心した。

「重ね重ねご親切な言葉、有難うございます。先生は全てお見通しで恐れ入ります。現地にいますと外国の人達の過剰反応に驚かされることがあります。まるで明日にでもサウジが

大混乱するのではないかと思わせるような発言があったり、それを受けて石油市場が急騰したりして驚いたこともあります。いつものことながら先生の何気ないご感想、ご意見に感心します。いつぞやの経済産業省の審議会で先生が発言されたことを今でも鮮明に思い出します」

慎太郎がそう言うと、古井は笑顔で慎太郎に聞いた。

「ほお、それは何だね。何か気の利いたことを言ったかな」

「あれは、今と大きく異なり石油需給が相当に緩んでいた時のことでした。審議会の皆さんは、異口同音に今はどこからでも石油は買える、石油危機などというものは昔の話という基調で話をしていました。そして、その中で委員長が先生に発言を求められましたが、先生は、たまたま今はオイルグラット(供給余剰状態)だが、いつ供給タイトとなるかも分からない。まるで時計の振り子のように、これまでも振れて来たことを念頭におくべきだと仰いました。そして、仰ったように今は供給タイトと言われるようになりました。政府は、あの時のオイルグラットを前提にした多数意見をもとにして政策を決めて来たわけですから、適切な対応が取り難くなっ

ているのではないかと思われます」

そう慎太郎が答えると、古井は気恥ずかしそうに続けた。

「池波君は良くそんなことを覚えているね。思い付きで言っただけだよ。政策立案の時には様々なことを考えなければならないと言う程度のことを言っただけだった。まあ、いつも物事を複眼視する必要があるとは思っているし、それがメディアにいる人間の気を付けなければいけない点だと思っている」

頃合いをみて、中田が口を挟んだ。

「お堅い話は、それくらいで。後でまたそんな話をするとして。折角だから、まず歌でも歌おう。石渡さん、次はいかがですか」

中田は石渡にそう言ってマイクを渡そうとしたが、石渡は、歌は好きだったが中田がより歌の好きなことをわかっていたので、受け取らなかった。

「駆け付け三杯は酒の話ですよ。やはり全員揃ったところで、中田先生の美声から始まるというのが一番のようで・・・」

と石渡が勧めると、中田は気を良くして楽しそうにマスターに声をかけた。

「そうか、それでは、僭越(せんえつ)だが、一つ先頭バッターを務めるか。マスター、何が良いかね」

マスターは何やらカウンターに置いてあったメモ帳を開きそれを覗き込むと中田に言った。

「それでは、先生。北の漁場をお願いします」

そして、カラオケのリモコンを操作して曲を入れた。

「そのメモ帳はなんだね」

古井がマスターに聞くとマスターは得意げに応えた。

「このメモ帳には中田先生の一八番、一九番などがぎっしり書かれているのです。ご要望により順番にお教えしています」

中田がいかにこの店の馴染(なじ)みであるかが分かった。

慎太郎は、このような店を持っている中田が羨ましかった。

やがて、北の漁場のイントロが流れると学生時代からピッチャーをしていたという、背の高いガッチリとした体をゆっくりと左右に揺らせながら中田が歌いだした。

「いのち温（ぬく）めて　酔いながら　酒をまわし飲む　・・・」

慎太郎は気さくなママ、マスター、それに三人の暖かな配慮で久し振りに痛飲し歌うことが出来た。最後に、中田、古井からメル友になるようせがまれた。

慎太郎には大変光栄なことだった。

この時は、まさか中田の姿を見るのが、これが最後になるとは夢にも思っていなかった。